

第二話 怪物の出る水車場

むかし、或る小瀧の傍に水車場がありました。

その水車場にはちび魔（ニッセ）がゐました。この水車場の持主が、よそでの習はしのとほり麦粉がよく挽ける呪に、クリスマス祭に、ニッセへお粥と麦酒とをやったか、どうか、わたしは知りませんが、どうもやったやうではありませんでした。何時も持主が水車に水を流し向けると、このちび魔が車の心棒を把とって運転を止めるので、一袋の麦粉も把とくことが出来なかつたのです。

水車の持主は、これはみんなちび魔の仕業しわざなのをよく知つてゐました。さて或る晩のこと、水車場にでかけて、松脂まつやにとタールとを鍋に入れて、火の上にかけました。そこで！水車に水を流し向けますと、しばらくの間は廻りましたけれど、すぐにぱったりと停りました。で、車を廻したり、拗ねぢたり、それから車の上の方を肩で押したりしました。けれどもなんの効能もありませんでした。その時分になつて、松脂とタールとの鍋は熱く沸いてゐました。持主は水車のあるところに降りて行く梯子の上の揚蓋あげふたを開けました。すると、果はたして

ちび魔は梯子の段の上に立って、顎を一ぱいに開けてゐました。揚蓋がすっかり口に入るくらゐに、広く口を開けてゐました。

「こんな大きな口を見たことがありますか。」と、ちび魔が言ひました。

ですが、持主は松脂とタールとが沸いてゐる鍋のそばにゐて、とっさに鍋を取り上げて、松脂もなにかも、一緒に開いた口あに投げ込み、

「こんな熱い松脂に触ったことがあるか。」と、どなりました。

そこで、ちび魔は車を放しはな、恐ろしく叫び、喚わめきました。

それから後は、その水車場には車の停ることはありませんでした。麦粉はおだやかに、やすやすと挽けました。

解説と註

怪物退治説話、怪物といっても一つ目小僧のやうな滑稽味もあり、座敷わらしや風の三郎に似たところもある。ノールウェー神話には小人が多く出て来る。

ちび魔（ニッセ）　一歳ぐらゐの幼児の大きさで、老人の容貌を具へてゐる小さい魔物。衣服は普通には灰色で、尖った赤いキャップを被り、ミケルマス祭日には農民の被るやうな円い帽子を被る。このちび魔の住む農家は繁昌するといひ伝ふ。悪戯いたづらをするが、台所や厩舎を一夜のうちに掃除したり、馬の手入れをしたり、真面目な手助けとなることもするといふ。